

佐土原キリスト教会 2022年12月11日
 聖書箇所：マルコ福音書 13章 14～27節
 説教題：選ばれた恵み

しばらく前ですが、1人の方とお会いして、ある集会のお話を伺う機会がありました。ある施設の館長さんが「現在は、第二次世界大戦の戦後ではなくて、第三次世界大戦の戦前です」と言われたそうです。ウクライナ戦争に関して、「核の使用」について盛んに論じられます。核が使われるような状態になれば、どうなるのか、危機感を持ちます。ウクライナ戦争が、早く、良い形で集結して欲しいと願います。館長さんは「平和のために祈り、行動して下さい」と言われたそうです。「自分には何が出来るのか」と思うことですが、平和のために祈ることは出来ると思いました。しかし、たとえ世の平和が破壊され、世界が減びるように思えるようなことがあったとしても、私達には希望がある。今日の箇所は、そのことを語ります。

受難週の火曜日(でしょうか)、神殿での論争を終えたイエスは、神殿を出て行かれましたが、神殿を出るに当たり、神殿に見とれていた弟子達に、「終末」について語り始められました。場所をオリーブ山に移し、神殿を見下ろしながらイエスは、「終末」について語り続けられます。今日の箇所は、その第2のまとめです。

先週も申し上げましたが、「キリストの十字架と復活」の後、キリスト教の歴史観では、世界は「終末時代」に入っています。「いつ世の終わりがあってもおかしくない時代に私達は生きている」ということです。その「終末時代の最後」に何が起こるのか、イエスは語られました。37節で「わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです」(37)と言われ、また15節には「読者はよく読み取るように」(15)という言葉も加えられています。イエス様は、全ての人(私達)に語られるのです。

しかし、この箇所が複雑なのは、特に14～23節ですが、イエスは、2つの出来事を1つの話で預言されるのです。2つの出来事というのは、1つは、この時から40年後(紀元70年)に起こる「ローマ軍によるエルサレムと神殿の破壊」の出来事です。もう1つは「終末時代の終わり(世の終わり)」の出来事です。イエス様は、その2つのことを、1つのこととして重ねて語られます。私達にとって、紀元70年の出来事は、既に起こった過去のことです。しかし、イエス様の預言が紀元70年に現実になったことによって、将来のことも必ず起こることが保証されると言えます。そのような位置づけで、イエス様のメッセージをしっかりと受け止めたいと思います。

1. 紀元70年の出来事

14節に「『荒らす憎むべきもの』が、自分の立つてはならない所に立っているのを見たならば(読者はよく読み取るように)」(14)とあります。「荒らす憎むべきもの」の出現は、「旧約」のダニエルが預言しました。紀元前167年、当時ユダヤを支配していたシリアのアンティオコス・エピファネスという人が、エルサレムの神殿にギリシャのゼウスの神を祭り、ユダヤ人にそれを拝むように強要し、祭壇にはユダヤ人の忌み嫌う豚を捧げて神殿を汚すという事件がありました。ユダヤ人を苦しめたのです。ですから「荒らす憎むべき者」という言葉を聞いて(読んで)、人々がまず思い浮かべたのはその事件だったと思います。イエスは「そのような事件が再び起こる」と言われたのです。それが、この時から40年後に起こる「ローマ軍によるエルサレムの破壊、神殿の破壊」でした。ローマ軍は、カイザルの像をつけた軍旗(偶像)を神殿に立てるのです。

一方でイエスは、その時が来るのを預言して、その時にどうすれば良いかを語られます。「ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい」(14)。「ローマと闘おうとするな。逃げなさい」と言われるのです。「屋上にいる者は降りてはいけません」(15)。屋上には外の階段を使って上ります。だから階段を使って降りて逃げるのです。「降りてはいけない」というのは、「1階の部屋の中に降りるな」ということであり、「家から何かを取り出そうとして中にはいってはいけません」(15)

と同じことです。「畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません」(16)も同じ意味です。要するに「何も持たずに逃げなさい」ということです。「だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です」(17)。逃げるのが困難だからです。しかし実際は、その時、多くの人々は山へ逃げるのではなくて、エルサレムの町(神殿)を目指して集まって来たのです。ローマ軍はエルサレムを包囲して、人々を飢餓に陥れる方法を取りました。エルサレムでは悲惨な状況が生まれたのです。

しかしその時、エルサレムにあった教会は、伝承によれば、「山」へ逃れた。ユダヤ(都)を離れ、ガリラヤ湖の下にある、デカポリスのペラという所に避難するのです。それでもパレスチナ全域に対するローマ軍の掃討作戦によって、パレスチナのどこにも危険が及びました。でもイエスは「もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、主は、ご自分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてくださったのです」(20)と言っておられます。教会にとっても危機的な状況の中で、ローマ軍は、ローマで起こった政治的混乱のためにパレスチナを引き上げて、教会は生き残るのです。21～22 節にあるように、その時には色々な人が立ち上がって、ある者は「私こそメシアだ。私のやり方について来い」と言って人々を自分達の仲間に入れようとしていました。でも教会は、イエス様の再臨に望みを懸けていましたから惑わされることはなかったのです。そしてペラに、ユダヤ人と異邦人を含む教会が生き残り、再び主の証しに生き始めることになるのです。

2. 終末の出来事

2000 年後に生きる私達は、この個所をどう受け止めれば良いのか、イエスは私達に何を語られるのでしょうか。アンティオコス・エピファネスが神殿を汚したように、ローマの軍隊は、神殿を破壊し、ユダヤ国家を滅ぼし、大変な悲惨を招きました。しかし、申し上げたように「『荒らす憎むべき者』が、自分の立ってはならない所に立(つ)」(14)の言葉は、これから終末時代の終わりに起こって来ることでもあります。それが、どのような形で歴史に登場して来るのか、良く分かりません。イエスは(21～23 節で)「そのとき…にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます。だから、気をつけていなさい。わたしは、何もかも前もってはなしました」(21～23)と言われます。現代でも「私が真のキリストだ」と主張する人がいて、その人を—(後継者を)—中心にした信仰集団があります。終末の混乱の中でキリスト者も、惑わす者に知らず知らずのうちに惑わされてしまうのかも知れません。

しかし、いずれにしても聖書は「やがて大患難時代—(混乱の時代)—が到来する」ことを告げています。「いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日」(19)が到来するのです。しかしそれは、神様の側から見れば「裁きの時」なのです。私達は感じています。この世には不正があり、恐ろしいほどの悪があります。特に今、独裁政治の酷さを感じます。その不正や悪ゆえの涙、嘆き、叫びがあるのです。信仰ゆえに迫害されるクリスチャンも沢山います。人間の歴史はそういったものを抱えながら流れています。しかし、それに対して何の決着もつけられないで、いつまでもズルズル流れて行くわけではないのです。必ず神がそのような出来事の全てに決着をつけられる時が来るのです。コロナ禍の前、私達も毎週「使徒信条」を通して「主は…かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」と告白しました。その「裁きの時」が世界にやって来る時—(それがどのような形なのか分かりませんが)—イエスは「その激しい裁きの時に信仰者は逃げろ」と言われます。「何も持たずに逃げなさい」。

それは逆に言うと、信仰者には逃げるところがある、ということです。どこに逃げるのか。神の中に逃げるのです。何も持たずに。「私にはどうすることも出来ません。神様、助けて下さい」と言って、信仰だけを持って逃げるのです。イエスは「神が天地を創造された初めから…」(19)

と言っておられます。それは、私達には思いもよらない苦難の時代、患難の時代であっても、それを司っておられるのは私達の神様だ、ということです。歴史は、大国の指導者がその行方を決定するわけではありません。歴史を支配し、裁きの時を支配しておられるのは神様です。私達は、何があっても、何も持たず、いや信仰だけを持って、その神様の中に逃げるのです。

さらにイエス様は、「…主は、ご自分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてください」(20)と言われました。22節にも、「選民」とあり、27節にも「選びの民」と出て来ます。かつてイエスは言われました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ 15:16)「神が責任を持って選んで下さった者達」だから—(繰り返しますが)—何があっても、私達は神の中に逃げ込むことが出来るのです。

終末の大患難時代に、キリストも遭遇するのか、しないのか、はっきり分りません。「キリスト者は、大患難時代は通らない」という理解もありますし、私もそう考えています。しかし、もし「神の裁きの時」に遭遇するにしても、その「裁き」に見える出来事は、イエス様を信じる者には、救いの出来事だと思ふのです。その「裁き」に見えるものを通して、イエスは、私達に本当の贖い(解放)を与えて下さるに違いないのです。また「信仰は苦難を通して聖められる」とも言います。私達の中の取り除かれるべきものが燃やし尽くされ、天の御国に生きるに相応しい者へと整えられる機会に違いありません。さらに私達にとって救いの言葉は27節の「そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます」(27)の言葉です。患難時代はイエス様の再臨に続きます。再臨のイエス様が、選びの民を、私達を、呼び集めて下さるといふ約束の言葉です。そして—(先週も紹介しましたが)—その時のことをCS ルイスがこのように表現しています。「その時、全宇宙は夢のように溶け去り、何かが一われわれがかつて思い浮かべたこともないような何かが一すさまじい勢いで押し寄せてくるのである。それは、ある人達にとってはあまりにも美しく、他の人達にとってはあまりにも恐ろしいものであって…それは、あまりにも圧倒的なものなので、すべての人間に、抵抗しがたい愛か、さもなければ抵抗しがたい恐怖を叩きつけずにはおかないだろう」(CS ルイス)。私達は「待降節」を通してイエス様の再臨を待望していますが、やがてイエスが空の扉を開けて入って来られるのです。イエスを信じる者にとっては、私達の涙が拭われ、死も、悲しみも、叫びも、苦しみもなくなる、あまりにも美しく、素晴らしい世界が展開する時なのでしょう。私は、高齢の兄弟が話して下さったイエス様をイメージします。その方が、神様だけを頼って「施設の子供さんを引き取ろう」と決めて、施設に迎えに行った時、イエス様が西の空から東の空まで両手を広げて立っておられるのが見えたのです。主は、私達をも両手を広げて受け入れて下さるのではないのでしょうか。だから私達は、これから先のことにも、恐れではなく、希望を持って、向かうことが出来るのです。感謝なことです。

3. 今の信仰生活

「過去の出来事」、「将来の出来事」と日常生活から離れたことを話しましたが、3番目にこの個所を、私達の日常生活に引き寄せて考えたいと思います。終末の時、私達は、信仰だけを持って神に頼るのです。しかしそれは、その時になって急に出来ることではないと思うのです。今、どのような信仰生活を送るのか、それが大事になって来るのではないのでしょうか。

CS ルイスがこんなことを言っています。「世界は100%クリスチャンである人々と、100%クリスチャンでない人々で出来ているのではない。だんだんとクリスチャンでなくなりながら、まだ自分をクリスチャンだと言っている人達が実にたくさんいる。その中には若干の牧師達も含まれている。また、まだ自分をクリスチャンと呼んではいないが、だんだんクリスチャンになりつつある人たちもいる…キリストに非常に強く惹かれているために、本人が考えているよりも、はるかに深い意味でキリストに属している、というような人びともいる」(CS ルイス)。どのよう

に聞かれるでしょうか。色々な意見のある言葉だと思いますが…心探られる言葉です。いずれにしても、普段の信仰生活をより良く積み重ねて行くこと、だんだんと神に近づいて行くこと、それが大切だと教えられます。祈りも、普段から祈りを積み上げておくことが大切です。そうでなければ、イザという時に、祈りによってそこを通過して行くことは難しいのではないのでしょうか。

ちなみに 20 節には「あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい」(20)とあります。終末の時、それは「それがいつ起こるか」、人間の手には届かないことのように思います。にもかかわらず、この大変な時期の決定を、なお人が動かすことが出来るかのように「冬や安息日にならぬように祈りなさい」とイエスは言われる。私達の小さな祈りは、神の前に決して小さくはないのだと思う。いずれにしても、普段の信仰生活が大事だということでしょう。自分の信仰が、イザという時に耐えられる信仰に育てられて行くことを願いながら、しかし具体的には何をするのか。

アメリカ建国の前の話です。日食があり、ある州の議会の議員達はパニックに襲われました。そして何人かの議員は、議会の休会の動議をしました。しかし議員の 1 人が言いました、「もし世の終わりでないのに我々が休会にするとしたら、我々は愚かだということが明らかになるでしょう。もし世の終わりだとしたら、私はむしろ自分の義務を果たしているところを見出されることを選びたく存じます」。信仰が育てられることを願いつつ、私達は、日々を神の前に誠実に生きて行く、地道に信仰に生きて行くのです。ルターは「たとえ世の終わりが明日来るとしても、私は今日リンゴの木を植える」と言いました。それが終末を迎えるための良い生き方です。

もしかしたら私達には時々、「私は信仰の弱い者だから、大丈夫だろうか…」とイエス様の言葉が遠くに聞こえるようなことがあるかも知れません。しかしイエス様は、これらの言葉を、直接的にはこの数十時間後にはイエス様を裏切って行く弟子達に語っておられるのです。彼らはそんなキリスト者だったのです。しかし、彼らは「選ばれた者」だった。(繰り返しますが)私達も「私は選ばれたのだ、神様はこんな者を選んで下さっているのだ」というところに立つのです。皆さんは、例外なく、選ばれた民です。どのような悲惨があろうとも、たとえ地が減ぶように見えることに出会っても、私達には、主に在って望みがあります。イエス様の再臨の前に私達が死ぬことがあったとしても、私達には「死を越えて甦る」という望みがあります。その望みを握りしめながら、地道な信仰生活を大切に生きて行きましょう。そのように「再臨の幻」に生きて行きましょう。